

「月を見る」

第1組 善行寺 千葉 要

「指月の譬え」というお話があります。指が月を指し示していても、その指を見ていては月は見えない。その譬えを通して、言葉ばかりに囚われてその言葉が示す真理に目を向けないことを戒めるお話です。

さて、この戒めを受けて指ではなく月のほうに目を向けたとして、私たちは真に「月を見た」と言えるでしょうか。

ドイツの哲学者イマヌエル・カントは、人間の認識の限界について語りました。私たちは世界を「ありのまま」に見ているのではなく、自分の認識構造を通してしか世界を認識できないと言います。

「月を見た」というとき、私たちが捉えているのは月そのものではなく、私たちの感覚と理解を通して現れた月の姿に過ぎないということです。

仏法においても同じではないでしょうか。「なるほど、わかった」と思ったとき、その理解はすでに私の思いの中に収まっています。真理をつかんだのではなく、真理を自分の理解の及ぶ大きさに縮めてしまっているのかもしれない。

私は指ではなく、月のほうを見ている。私は言葉ではなく、その先にある真理に目を向けている。その思い込みが、かえって私たちを真理から遠ざけてしまっていないでしょうか。

親鸞聖人は、私たちを「煩惱具足の凡夫」と見つめられました。どれほど聞いても、考えても、なお自己中心を離れられない存在だということです。だからこそ浄土真宗は、「私が真理を見た」という立場には立ちません。私にとって真理は不可知である

が、真理のほうから私たちに向かい、届いているのだと見ます。

月を具に観察したとしても、私たちは月そのものをつかむことはできません。しかし月の光は、つかめなくても、つかもうとしなくても私たちを照らしています。私が理解したから照らされるのではなく、理解を超えてすでに照らされているのです。

真理を正しく見られる私になることが救いなのではなく、見誤り続けるこの私に南無阿弥陀仏とはたらきかけてくださる大悲がある。そのことに気づかされるところに、聞法の歩みが開かれていくのではないのでしょうか。